

断章 (Ⅷ)

山中哲夫
Tetsuo YAMANAKA

外国語教育講座

CCXI

太宰治の文章を読んで、志賀直哉が否定的な感想を述べたものがいくつかあるが、その中でもわたしが面白いと思ったのは、新潟市内でもっとも由緒ある西洋料理店で講演したときの太宰の随筆にたいする、志賀の反応である。誰が好きこのんでこんな田舎町まで来て講演をするか、招待されて仕方なくやってきたのだ、という内容の文章の合間合間に、講演に呼ばれて得意がっている作者の自惚れが垣間見られて、非常に不愉快だ、と志賀は書いている。他者の偽善や欺瞞を断固許さない志賀らしい批判だが、何もわざわざそんなことまで書くには及ばないだろう、という気もする。太宰のその文章を読めば、少なからず、そういった瞞着を感じ取る読者もいるだろう。ある読者は太宰らしいと微笑んで、それですますかもしれない。志賀の太宰にたいするこの厳しい否定的態度は、考えてみれば大人気ないことではあるが、そこにわたしは志賀の父親にたいする執拗な反発の思いを感じ取る。太宰を通して、彼は自分の父親にたいして非難の言葉をぶつけているように思われるのだ。父親の（彼がそうだと見做した）欺瞞、偽善を許さないように、また志賀は、自分自身の中にもある（かもしれない）欺瞞、偽善を厳しく糾弾していると思われる。太宰にたいする、彼のこの片意地な態度をわたしはとても面白いと思っている。

CCXII

原書を読む一失われた時間がよみがえる。辞書をひく。ゆるやかな時間が流れる。忘れていた午前光、午後の静けさ、夜の優しさがよみがえる。原書を読むとき、青春がよみがえる。青春とともに、太古の時間のようなゆっくりとした時がよみがえる。原書を読むわたしのまわりに、十六世紀イタリア・ルネサンスが、十八世紀フランス・ロココが、十九世紀第二帝政がよみがえる。原書を読む。辞書をひく。ボードレールが自ら綴った言葉がそこにある。ヴェルレーヌが自ら歌ったリズムがそこにある。そのフランス語とともに、百四、五十年前のパリがよみがえる。百四、五十年前から自分がそこにいたような錯覚をおぼえる。ユゴーの強靱な文章に、ノートル＝ダム寺院の前庭 (parvis)

で踊るエスメラルダの幻影が眼前に浮びあがる。原書を読む。そのときわたしはすでに異郷にいる。

CCXIII

ある詩人は言った—ラテン十字は《「子なる神」の血の惨たらしさを思い出させる》ので好まない、と。これにたいしてギリシア十字は《円環の最も遠い二点を結ぶ線二本で出来ているから》《二本の線が交わる点は位置だけあって大きさのない無限小の宿る場所》であるから、さらにまた《銀の鎖に通したクロームの簡素なギリシア十字は、血と愛と幾何学との徴となり、誰に見られることもないひっそりした宇宙の中心となって、彼の胸に宿っている》から、彼には好ましいものとなる。この円環の幾何学が彼の詩学の中心にある。数理的幾何学が硬質の抒情となり、硬質の抒情は神秘的宇宙開闢論の中で融解する。それは彼の生き方そのものだ。

CCXIV

スタンダールの『イタリア年代記』に収められた『カストロの尼』を読んでいる途中で病氣入院し、手術と術後の療養で夏が過ぎ、秋が去り、いつしか冬のストーヴの前でブルーストの『読書の日々』を読んでいる自分に驚く。蟬の声とイタリアの風景とが重なり合う中で、イタリア語からの翻訳調から、スピード感溢れる歯切れのよいスタンダール独特の文体になってきたな、と十六世紀イタリアの情景に十九世紀フランスの文人の肉声を聞く、不思議な臨場感にいままさに陶醉しようとした矢先に、わたしは病室のベッドに縛りつけられ、天井の白さをみつめるだけの身となった。再び本を手にしたとき、季節はすでに初冬に入り、わたしが目で追う作家の文体はまるで変わったものとなっていた。スタンダールの夏の文体から、ブルーストの冬の文体へと変わっていたわけだ。まことに文体とは不思議なものである。かつて古人は「文は人なり」と言ったが、「文」は「人」以上のものである。文体にはその人の人格を越えた何ものかがある。この正体はいまだに突きとめることができない。人はある文体を使って文章を書きながら、文体によって文章を書かされてもいる。個を越えた何ものかが文体にはある。古典文学はその最高の例であろう。

CCXV

文体とは書き方ではなく、考え方だと以前書いたことがある。これは若い頃から思っていたことだが、書き方ではなく考え方というのは、結局、文体によって文章を書かされていることに他ならないのではない。プルーストは自らの *idée* や *vision* をもっともよく伝える手段としてあの独特の文体を創出した。しかし一方でまた、あの文体のおかげで、彼はさらに多くの、より深い *idée* や *vision* を表現し得たのではあるまいか。

CCXVI

ある高名な独文学者の最晩年は、病気のために必ずしも幸福とは言えなかった。わたしの旧知の人はその独文学者の最後の高弟であった。彼は恩師を病床に見舞った。恩師はどのような気持でこの弟子を迎えたらうか。老醜は誰にでも訪れるが、病を伴った老醜は耐えがたからう。迎える側も迎えられる側も。遠きにありて思うのは何も故郷ばかりではあるまい。恩師もまたそうであろう。久しぶりに再会したわたしの恩師から、マラルメの有名な詩句の一節の出处を訊ねられて愕然となった。恩師はその道の大家であったからだ。このとき以後、久しくお目にかかっている。病床でも見舞うことはすまいと考えた。どちらが先に死の床に就くか、それは分らないけれども。

CCXVII

正宗白鳥の外国旅行記を読む。これほど「感動」のない海外旅行記もめずらしい。薄っぺらな「感動」によって観察眼が曇らされてはならない、と意識的に自然な情動を抑え込んだというよりは、もともととはじめからそのようなものは持ち合わせていない、といったような素っ気なさである。しかしそれでも小説家として見るべきところは見ているし、独特のペシミスト、リアリストとして考えるべきところは考えている。島崎藤村とはまた異なった立場で、彼は彼の孤独を欧州でも生きている。孤独に生きている。日本であっても、パリであっても、それは同じである。乾いた皮肉なその文章に、苦いユーモアが混ざり合って、忘れがたい名文となっている。海外旅行体験記だが、第二次大戦の影が忍び寄り、緊迫した欧州の市井の日常生活を、淡々と描写した私小説的小品と言ってもいい。しかしそれにしても、白鳥の人間と人生にたいする懷疑は徹底している。また、自身にたいする諦念も。どこへ行っても。

CCXVIII

東洋人種であることからくるコンプレックスによって、欧米人の態度に実際以上の悪意を感じ取る、そう

いった欧米滞在の日本人にありがちな猜疑心に、白鳥もまたとらわれているが、これはある程度仕方のないことだ。しかしこの人種間の優劣の問題が、個人を越えて、国家規模の、戦争をも引き起こしかねない大きな問題を背景にもっていたとしたら、話はまったく異なる。白鳥の文章のところどころには、優勝人種であるとか、ユダヤ人種であるとか、あるいは「蔓延る」といった言葉などが散見されるが、こういった言葉から、生殺与奪や優勝劣敗が人種の問題と緊密に結び合わされて、戦争へと向かってゆく当時の欧州の雰囲気を感じ取れる。日本でも事情は同じであろう。八紘一宇、大東亜共栄などと唱えながら、その実、優秀なる大和民族の下に下等なる他のアジア民族が支配されて然るべきだという、民族の傲慢さが世に「蔓延って」いた（日本人は満州国では「一等国民」であった）。この重苦しい空気は周知のとおり、欧州においてはやがてナチスによるユダヤ人迫害へと進展してゆく。星の王子さまがバラの種子とパオパブの種子が見分けがたいと言ったり、根が「蔓延って」星が破壊されないうちに「根絶やしに」しなければ、と言ったりする、その言葉の遣い方にも同じような当時の雰囲気が感じ取れる。ユダヤ人を根絶やしにしようとするラシストたちを根絶やしにしなければ、と同じ論法で対抗しているところに、当時の出口のない泥沼状態がうかがえるようだ。白鳥もまたその渦中にいた一人であったろう。

CCXIX

隣の研究室で哲学の先生が、数人の学生たちを前にして、静かに哲学の話をしている。その声を聞きながら、大学の講義の原点があそこにあると思った。

CCXX

樹木が伸びて大きくなった。赴任したての頃、三階の窓にも達していなかったメタセコイヤが、いまでは屋上を越えるまでになった。日々、絶えざる成長が樹木をここまで大きくした。自分はここまで大きくなったであろうか。自然界のあらゆるものから追い越されるばかりである。雲に追い越され、水に追い越され、日々の太陽に置き去りにされる。そういうとき、自分もまた自然界の一部であることをふと忘れてしまう。生まれ、成長し、滅びる自然界の一部であることを。

CCXXI

神西清は昭和十八年五月二十二日の日記にこう書きしるすー「旅の印象の崇高さと、世事の低俗さと」読書もまた旅と呼べるならば、同じことが読書についても言えるだろう。さらに音楽の崇高さは、旅や読書のそれをも凌ぐ。ことにモーツァルトは。戦時下にひそかに聴くモーツァルトはさらにまた。この前日、山本

五十六元帥戦死の公表があった。神西清の庭前では見事な紅薔薇と芍薬が咲き誇っていた。

CCXXII

迷宮の世界の中へ入った日本社会。まわりのあらゆるものが崩壊してゆく。もう引き返せない。出口はない。

CCXXIII

不信と不寛容の時代。ある尼僧作家は開戦直前の雰囲気、に現在の日本がとてもよく似ている、と憂えていた。長引く経済不況と徐々に深まる外交的孤立。とりわけ近隣諸国との不協和。その中でも、当時と現今でもっとも似ているのは、他者に対する不信と不寛容であろう。これがきわまれば、あらゆる自由が抹殺され、戦争への引き金が引かれる。

CCXXIV

串田孫一も嵐の夜、山の中でモーツァルトを聴いた。山の中ではどんな音楽も一羽の岩雲雀のさえずりにも及ばない、とそれまで彼は考えていた。山の世界と音楽の世界はまったくかけ離れたものと彼は思っていた。モーツァルトがその先入見を打ち破った。旅は崇高なものである。音楽もまた崇高なものである。早春の山の旅で、嵐の夜に聴くモーツァルトは、戦時下に神西清が聴いたものとはまた違った輝き方をしたろう。フリードリヒの絵にベートーヴェンがふさわしいように、この山の詩的哲学者にはモーツァルトがいかにふさわしい、ことにそれが早春の時候であれば、なおのこと。嵐の真夜中ならば、さらになおのこと。

CCXXV

モーツァルトの音楽を聴いていると、すべてが許されたような気持ちになってくる。バッハとはまた異なった神が宿っているような気がしてならない。バッハの音楽には贖罪や復活といった言葉が思い浮ぶが、モーツァルトの音楽にはそういう言葉はまったく思い浮ばない。ただひたすら無条件の愛と赦しのみである。しかしこの悲しみは何なのか。

CCXXVI

山歩きができないからだになっただけ、『山のパンセ』は読書という形で山歩きの醍醐味をわたしに教えてくれる。読書というもう一つの山の旅をわたしに可能にさせてくれる。山に登った者の五感と思索によって綴られた文章を、今度は読む者が逆に辿って、現前に日本アルプスの山々やその他の高峰を思い描き、登山者の思いをなぞってゆく。もちろん、それはブルーストが語ったように、まったく同じものではなく、新たな創造がはじまる出発点に他ならない。彼が見たも

のと、わたしが想像したものとは別物である。彼が山頂で吸い込んだ空気や、雪渓で汲んだ水の感触は、おそらく彼だけのものであろう。しかしながら、わたしもまた、読書という世界の中で、別種の清冽な空気を吸い、清水を掬った気になっているのである。これはわたしだけのものであり、この世ならぬものである。

CCXXVII

新たに発見された神西清の若き日の日記に、古典文学の素養ということが書かれてあった。ボードレールはボワローの詩集をすべて暗記していた、というアナトール・フランスの言葉を引いて、神西は現代における古典文学の重要性を説いている。確かにブルーストもその読書論の中で、『アンドロマク』の有名な詩句を詳しく分析しているし、日本の知識人でも、戦前には中学生でモリエールの喜劇を演じていた（串田孫一）。神西清が記した日記のこの頁には、清の彭甘亭の詩句が引いてあるが、それすら読めない自分の教養のなさが厭わしい。フランス文学やロシア文学と漢籍や日本の古典文学が同程度に文学の基盤となっていた戦前文学者たちの知識の深さと広さ。神西の生涯の友であった堀辰雄にしてもそうである。戦後の教育は、戦前の全否定によって、何か重大なものを捨て去ってしまったのではあるまいか。

CCXXVIII

自然について。神西清の日記に、あるロシア婦人の言葉が記されてあった。彼女によると、日本語には「自然」を表わすロシア語「プリroda」にあたる言葉がない、という。日本語の「自然」はあまりに断片的で、総体的にすべてを統括する大きさに欠けている、というわけである。英語の「ネイチャー」も「自然」と等価ではない。西洋犬と日本犬が異なるのも構わずに「ドッグ」と呼んでいるのと変わるところがない。自然主義も、したがって、当然違ったものとなる。《僕は、日本人には西洋の自然主義といふものはわからないのぢやないかと思ふ。自然主義といふことは、ありのまま主義などといふことではない。素朴実在論などとは凡そ縁の遠いものに違ひないのだ。それは科学主義といふことであつた。日本の自然主義はこれに反して、常識主義・日常主義といふことであつた。》パリ植物園内にある恐竜博物館に、ホルマリン漬けにされた畸形胎児の標本がずらりと並べてある。サルも人間も同列である。科学主義とはこのことである。西洋の自然主義はこれを土台に築き上げられた。これは立派な一つの「精神」であろう。

CCXXIX

《意志が明るいよるこびに向つて羽搏くとき、汚れたもの、矮小なるものは、この世の現実は何ひとつあ

りはしないのだ。》(神西清)ギリシア的晴朗。地中海の清閑。健康なる意志は、行き詰ったデカダンの暗闇の向こうに射している一条の光である。飛翔は希望の翼によって可能となる。精神の夜が明け朝になると、現実が違ったふうに見えてくる。現実が現実以上に崇高なものに見えてくる。文化も芸術も人間の営みも皆、これと同じだ。

CCXXX

文化が衰退するとき、人はもう一度、古典に戻る。ヨーロッパの文化はそうにして絶えずギリシア・ラテンに戻っていった。文化が衰退するとき、異教の生命を浴びる。ヨーロッパの文化はそうにして絶えずイスラム世界から新たな生命の火を吹き込まれた。日本文化が衰退するとき、果たして現代のわれわれに戻るべき古典があるだろうか。『万葉集』や『源氏物語』の世界に郷愁をもって戻ることができるだろうか。新たな生命の火としての異教の文化を日本は持っているだろうか。外国人の血と混ざることを嫌ってきたわれわれ日本人は。日本は過去を失い、未来も失ったのだろうか。絶えず崩壊・消失しつづけるこの現在にあって。デカダンの夜が続く…。

CCXXXI

自分が描いた絵のかたわらに、自分の言葉で詩を添える。至福のとき…。

CCXXXII

『アンドロマク』の有名な一節—「なぜあの人を殺したのです? あの人は何をしました? どういう理由で? 誰がそう言いました?」エルミオヌのこの四つの言葉は明らかに錯綜している。プールの指摘をまつまでもなく、《どういう理由で?》は直前の《あの人は何をしました?》ではなく、その一つ前の《なぜあの人を殺したのです?》にかかる。最後の《誰がそう言いました?》も最初の《なぜあの人を殺したのです?》と関係していて、“あの人を殺せと誰が命じました?”という意味である。このような「表現のジグザグ」のもつ独特の魅力をプールは「回帰的折線」と呼んで賞讃している。通常の統辞法を無視したこのような分断は、韻律のためにやむを得ず起ったにせよ、そこにはさすがに見事な文章の断面のきらめきと緊迫感がある。この十七世紀古典悲劇の名詩句を、十九世紀末の象徴派詩人の難解な詩句のきらめきと緊迫感に重ね合わせたくはなる誘惑に駆られるのは、わたしだけだろうか—《Hyperbole! de ma mémoire/ Triomphalement ne sais-tu/ Te lever, (…))》マラルメにもラシーヌの伝統が生きている。

CCXXXIII

菱山修三は痛ましい。零下の実験室で水が凍って次々に割れてゆくフラスコのように、激しく咳をするたびに鱗が入り毀れてゆく彼の肺腑と彼の生活。毀れてゆくたびに詩ができてゆくこの悲惨。透明できわめて薄いガラスのコップの中に充満した純粹の血。やがて咯血とともに美しい言葉が白いシートの上に飛散する。この詩はしんじつ痛ましい。自分の詩はそんなに美しくはない、と彼は笑って言うかもしれない。しかし、片脚を失って落ちた雀を両手で拾い上げて、「何故、私の真似をする!」と思わず叫んだ男の言葉が、美しくないはずはない。痛ましくないはずはない。

CCXXXIV

「少ししか匂はぬ高き梢の花を、すなはちこの文(ふみ)を、かなしきひとに参らす。」(菱山修三)

CCXXXV

いま読んでいる菱山修三の詩集には、故人となったわたしの師友の手で書き込みがしてある。見おぼえのある懐かしい鉛筆の文字や傍線が、彼の存在と、彼とともにすごした青春の思い出を偲ばせて、ついそこに目がとどまってしまう。傍線を引いたその箇所がいかにも彼らしくて、微笑ましくなるときもある。頁のあちこちに、彼がふれた痕跡がある。詩人と重ね合わされた彼の切ない「生」が、頁という空の高いところで、雲雀のようにかすかに鳴いている。青空もなく、梢もなく、麦畑もない、何もない紙の余白のその奥で、わたしにむかって鳴いている。まだまだこの先は高いのだ、この道程は遠いのだ、まだまだ生きつづけよ、と。

CCXXXVI

詩の空位時代。神の不在。詩を希求する者に詩のありかは不明であり、神を希求する者に神の姿は見えない。「もはや」なのか、「未だ」なのか。近代ヨーロッパ社会では詩の空位と神の不在が軌を一にしていた。もっとも早くそのことに気づき、もっとも鋭敏にそれに反応したのがボードレールであった(その次がマラルメだ)。彼を近代詩人の先駆者とするのはそのためである。彼のダンディズムもミスティフィケーション(自己韜晦)も、この二つの大きな欠如を背景にもっている。『悪の華』はこの二重の暗い絶望の沼地に花ひらいた。しかし、彼はまだ幸福であった。この二つの欠如に気づき得たからだ。この二つの決定的な欠如から、後世に残る名詩を幾篇も作り上げることができたからだ(だからと言って、詩の空位時代が過ぎ去ったわけではもちろんない)。現代のわれわれは、ボードレールの時代よりもさらに不幸な時代にいる。詩(文学)が空位であること、神(信仰)が不在であることを、

誰も不思議に思わないからだ。そのことに苦しんでいる者は数えるほどしかない。詩のありかは不明であり、神の姿は見えない。「もはや」なのか、「未だ」なのか。

CCXXXVII

具象と抽象。個別と普遍。不定冠詞と定冠詞。具象をいかに抽象に近づけるか。個別を通していかに普遍を表現するか。不定冠詞にいか定冠詞の意味をあたえるか。マネやモネの花の絵を見ながらマラルメはどのように考えたのかもしれない。そのように考えた、その考えのプロセスが『(デ・ゼッサントのための) 続誦』という詩に結実したのかもしれない。彼がこの作品で描いたアイリス＝観念の花の、光にあふれて、くっきりとした輪郭を輝かす、現実離れした佇まいを思うとき、また「地誌」「風光」「押葉標本集」といった言葉とその佇まいを重ね合わせたとき、さらに、この初稿が書かれた1870年代中頃のパリの芸術的雰囲気背景にしたとき、このアイリス＝観念の花は、当時の印象派画家たちの絵が喚起するイメージからヒントを得たような気がしてくるのである。

CCXXXVIII

《蛾は、数ではない。負数なのだ。汚され、破られ、すてられ、ふみにじられたいのちの、最後のさびしい火祭なのだ》(金子光晴『蛾Ⅳ』) 一蛾とは、粉黛にまみれた性の営みの中で悲しく死んでゆく、最下層の娼婦たちに他ならない。そしてそれはまた、京の色町で育った異常に早熟な子供たちの、秘密の物置小屋でくりひろげられる、いかがわしい性的遊戯の饗宴の中で、絶望的な思いでみだらな感情をかき立て、そうやって大人たちに復讐している、十歳になるかならぬかの幼い金子光晴の姿そのものである。そのような淫靡な饗宴の裏側には、十六歳の小娘といってよいヒステリー症の義母によって、着せ替え人形のようにおもちゃにされ、女装させられて、精神生活の上で養母に「犯された」三歳児のマゾヒズムが隠されている。蛾とは、つまり、爛れた娼婦である金子光晴その人の姿である。戦争末期の追いつめられた詩人の精神状態を表わしているという、それ以上に。

CCXXXIX

金子光晴はアナキストの詩人である。彼のアナキズムは一種の皮膚感覚を通して幼い頃から身に沁み込んだものである。ブリュッセルでも、パリでも、上海でも、バタビアでも、彼は外界の事象をこのアナキスト的皮膚感覚で体験的に理解した。虚実を峻別するこの生理的・本能的判断力によって、中国大陆における日本軍の実態を、また欧米列強の欺瞞と陥穽を、あるいは内地での一般国民の中国にたいする「火事場

泥棒の気分」(中野重治)を、集団の暴力性を、瞬時に見抜いていた。思想的・政治的にアナキストである前に、彼はあらゆるものにたいして本質的にアナキストであった。むしろ自分自身にたいしても。つまり、結果的にアナキストとなったということ以外何も信じていないのである。彼の詩の言葉はそこから紡ぎ出された。

CCXL

崩壊してゆく大学のことは、もう語るまい。すべて灰燼に帰して、柱一本残っていない荒涼とした焦土に立ち尽くすように、日本の大学が、もっと言えば日本の教育が、どのように荒廃をきわめるか、それを見届けよう。昭和のはじめ、戦争へ、戦争へ、と向かっていった時勢を誰も止め得なかったように、「良心」を捨てて、財政的にも学問的にも崩れ落ちてゆこうとする大学のこの荒廃を、誰ひとり止めることはできない。国立私立を問わずすべての大学が連帯し、全国規模のストライキを起し、国民世論がそれを支持する、という「奇跡」でも起きないかぎり。しかしながら日本国民がそのような民主主義的な連帯意識を持ち得るほど、そこまで成熟した国民とは思えない。もしそうであったなら、あの無謀な戦争はもっと早く、もっと少ない被害で食い止めることができただろう。危機的状況に遭遇したとき、相互連帯の「公」を持ち得ず、狭い「私」のエゴイズムの中に逃げ込もうとする、この日本民族の特質は、明治の頃からそれほど変わっていないのかもしれない。

追記—前号『断章』(Ⅶ)のNo.185において、川端康成『千羽鶴』自筆原稿の書き込みの「は」は「に」の誤りであったので、つぎのように章全体を訂正します：川端康成『千羽鶴』の自筆原稿を見る機会があった。書き出しの第一枚目である。加筆修正はほとんどない。「鎌倉円覚寺の境内にはいつから、菊治は茶会へ行こうか行くまいかと迷っていた。時間はおくられていた。」が「時間にはおくれていた」と「に」が書き加えられ、「案内」が「案内状」となったくらいで、いずれもより正確な表現に改められただけで、重大な変更はない。作者ははじめからすでに頭の中で文章が出来上がっていたかのような感がある。若いときの女性的な書体が、戦後は肉太の男性的な文字に変わったことが印象的だった。これにたいして、芥川の文字は、初期の女性的だがそれでもまだ生の勢いが感じられるものが、自殺直前の文字は、まるで線香花火の消える前の火玉のように小さく縮まって、まったく生命力が感じられない。このことは思いがけず隣の人の指摘によって、はじめて気がついたことである。

(平成18年8月2日受理)

